

ギョウブ ⑤

2014 年お年賀号

gyahunkoubou.com

掲載アーティスト

森達也
横山秀夫
葉真中顕
押井守
橋本忍
宮崎駿
黒沢清
庵野秀明
今井絵理子
島袋寛子
鈴木亜美
華原朋美

特集

2014年 あなたの扉を開く5つの鍵

社会に目を向ける
クリエイターから学ぶ
昔なじみと再会する
新しい才能を見つける
電子書籍をたしなむ

SCANDAL

香音
家入レオ
ロビン・シック
西野カナ
藤井太洋
夜見野レイ
ミナセ

ギョウブ工房

ぎゃふん⑤試し読み版

芝居魂^⑤

特集

2014年 あなたの扉を開く5つの鍵

あなたの人生を輝かせるヒントは
身近なところに落ちている。
今年はそのような小さな〈鍵〉を探してみよう。



芝居魂工房

もくじ

あなたの扉を開く鍵 その1 社会に目を向ける 3

オウム真理教の裁判を見つめる森達也『A3』を読んでわかったこと	4
横山秀夫『64』はメディア、警察、そして私たちの三角関係を炙り出す	8
葉真中顕『ロスト・ケア』でわかるこれからの社会派小説のありかた	12

あなたの扉を開く鍵 その2 クリエイターから学ぶ 15

クリエイターの仕事術はサラリーマンも使えるかもしれない	16
サラリーマンはどうやって小説執筆の時間を作る？	22

あなたの扉を開く鍵 その3 昔なじみと再会する 27

今井絵理子『just kiddin'』は歌の楽しさをあらためて教えてくれる	28
島袋寛子『私のおキナワ』は1日1曲ずつ聴こう	31
鈴木亜美『Snow Ring』のニワカだけドニワカじゃないレビュー	32
華原朋美『夢やふれて』『I'm proud』のコンボで泣けい！	36
アニメ『ジョジョの奇妙な冒険』はなぜこんなにおもしろいのか？	38

あなたの扉を開く鍵 その4 新しい才能を見つける 41

ガールズ・バンドSCANDALの今まで気づかなかった魅力	42
香音『花粉デビルをやっつけろ！』で花粉！ぎゃふん！発奮！	45
家入レオ『LEO』でレコード大賞がダテじゃないことを知れ	46
Robin Thicke『Blurred Lines』はボクの心を逆撫でする	49
西野カナ『Love Collection』に2時間ドップリ溺れてわかったこと	50

あなたの扉を開く鍵 その5 電子書籍をたしなむ 53

藤井太洋『GENE MAPPER』を電子書籍入門者に勧める理由	54
『天使の街』は「ハルカ」「マヨ」の2冊の〈電子書籍〉でリリース！	58

あなたの扉を開く鍵 その1

社会に目を向ける

ほんとうは楽しいことだけを考えて生きていくほうが幸せだ。
だが、ときには自分の住む社会にも思いをはせよう。
それが自分の幸福を守ることにつながるからだ。





オウム真理教の裁判を見つめる 森達也『A3』を読んでわかったこと

集英社文庫 [上] ¥735 [下] ¥735

オウム真理教にまつわる一連の事件。メディアでその話題が扱われることは少なくなりました。だからといって問題がすべて片づいたわけではない。むしろ、誰も関心を払わなくなってきたからこそ、私たちは積極的に問題意識を持たなければならない。

森達也の『A3 エー・スリー』は、オウム真理教の裁判に迫るドキュメンタリーだ。本作は第33回講談社ノンフィクション賞を受賞した。われわれの頭の中で事件が風化しつつある今日、「事件」が恐るべき事態に陥ってしまったことを読者の眼前につきつける。とにかく一度手に取ってほしい。そして、本書を読んでもなお、あなたはこの事件に無関心でいられるだろうか？

戦後最大の事件を日本の裁判は裁けない

本作を読んで初めて知った驚愕の事実。それは、もはや麻原彰晃に訴訟能力がないということ。

裁判で麻原は、まともな証言をしていない。精神異常のふりをしている。つまり詐病。そうメディアで報道されている。裁判所の判断も同じだ。私も純粋にそう考えていた。けれども、森によれば、麻原はほんとうに病氣らしい。それでも裁判を強行する裁判所を森は厳しく糾弾する。

拘置所にいる麻原について、僕は「あること」を知っている。多くの拘置所関係者も知っている。でも、面会時に彼が頻繁に行うというその「あること」が何であるかは、今はこの誌面には書けない。書けない理由も書けない。……
[中略] ……だから須田賢裁判長に訊きたい。あなたはこの連載を読んでいるのだろうか。読んでいるのなら、たぶん「あのことか」と察しがつくはずだ。あなたはこれを知ってなお、麻原被告には訴訟能力があると断定するつもりなのだろうか。ならば僕は断言する。あなたのほうが普通じゃない。

雑誌掲載時に書けなかった「あること」は、この本を読み進めばわかる。それは、**麻原の自慰行為**だ。

面会時における麻原の自慰行為は、多くの人が目撃してい

る。演技ではない。射精もしている。…… [中略] ……確かに自慰行為は、健康な男子なら誰でもする。問題は、見知らぬ人や実の娘たちの前で、これをできるかどうかだ。

オウム真理教の一連の事件において、最重要人物である麻原がこのような状態であること。そして、それを知らなかったことに衝撃を受けた。とくにショッキングなのは、「半年内の治療で軽快ないし治癒する可能性が高い」と、麻原を鑑定した精神科医が述べていることだ。

だが、裁判は強行されている。結論を早く導き出すために。
(事件の真相を究明する)。これは絶望的だ。

もし麻原が森の言うような状態なら、裁判を一時休止し、治療にあたらせるべきだ。これは麻原の救済のためではない。私たち自身の生還のためだ。

真相が闇に葬られることになれば、事件の再発を防げない。第2、第3の“オウム真理教”の出現を防ぐことはできないのだ。

マスメディアの腐敗はなぜ起こるか

ネット上では「マスゴミ」という表現がよく使われる。個人的には好きな言葉ではないので、積極的に用いることはないが、気分は共有している。つまり、マスメディアはあまり信頼できない。

だが、なぜそうなるのか。その理由がよくわからなかった。森はその一端を解明する。

言ってみれば、視聴率や部数という神経伝達物質をやりとりするニューロン（神経細胞）とレセプター（受容体）の関係だ。…… [中略] ……これはメディアの必然だ。回避はできない。だからこそこの端数に、常に思いを巡らすような接し方（リテラシー）が必要だ。

メディアリテラシーは、既存のマスメディアよりも、ネットメディアに接するときのほうがより重要だ。テレビや新聞、雑誌などと比べて、ネットのほうが信頼できる、なんてことはないだろう。むしろ逆だ。だが、そのことはなかなか意識に上りにくい。だからこそ、より注意を要する。

事件のことはわからないがこの社会のことはよくわかる

前述のように、裁判で事件の真相が解明されることは絶望的だ。でも、司法、メディアなどを含めた、われわれの社会のことは本書を読めばよくわかる。

今の情勢では、麻原は数年以内に処刑される可能性は高い。そのとき社会は（つまり私たちの多くは）どのような反応を示すか。

それはきっと、圧倒的なまでの無関心だ。

無関心はまずい。われわれはこの裁判に向かい合わなければならない。繰り返すが、それは麻原やそのほかの被告たちを助けるためではなく、私たち自身の救済につながるからだ。



横山秀夫『64』はメディア、警察、^{あぶ}そして私たちの三角関係を炙り出す

文藝春秋 [単行本] ¥1995 [kindle版] ¥1600

昭和64年に起きた誘拐殺人事件を巡る警察内部の抗争を描く。前ページで取り上げた『A3』とは異なり、あくまで本作はフィクションであり、娯楽作品だ。だから、社会問題に深く切り込むことを目的とした小説ではない。しかし、一方で、報道機関、警察組織の内情がリアルに描写されており、虚構と現実の世界は地続きだ。つまり、そこからわれわれの住む社会の問題を見出すこと、あるいは考察のきっかけにすることは十分に可能ということだ。

ここでは、そんな社会問題の“教科書”としての見どころと、娯楽作品としての魅力を読み解いていこう。

地味な設定ながらダイナミズムがある

警察モノの名手である横山秀夫。本作も警察組織を舞台にしているだけあって、その手腕は振るっている。

主人公は、刑事ではなく、警察の広報マンだ。事件を直に追うわけではないので、言ってみれば地味な描写になる。

しかしながら、そこには確かなドラマがあり、ダイナミズムがある。物語の次の展開を期待させるサスペンスにあふれている。

いわば「事件は会議室で起きている」わけだ。

そして、ほんとうに「会議室」だけで物語が完結するわけではない。きちんと警察モノとして「事件発生→捜査→解決」のカタルシスが得られるようになっている。

事件報道は匿名か実名か

本作で物語の中核をなすのは、マスメディアとの攻防だ。具体的には「事件の当事者を実名で報道するか、匿名とするか」がモチーフとなる。

実名・匿名報道は、古くて新しい問題だ。昨年も話題になった。事あるごとに問題が持ち上がるが、一向に解決はみない。

「記者と完全に決裂してしまえば、ウチは宣伝の媒体をみすみすドブに捨てることになります。かといって、彼らの要求を丸呑みしていたのでは捜査機関たる警察が普通の役所に成り下がってしまう。それに最近是人権だのプライバシー

シー保護だの色々うるさいですからね、すべてのケースを
実名で発表すれば、文句を言う当事者が増えてウチに対す
る世論の風当たりがきつくなる。詰まるところ、匿名問題
は『話し合いは平行線のまま、しかし継続している』とい
う状態を維持していくほか当面方策がありません。戦果は
得られずとも、警察の広報を攻撃している限り、記者の面
子だつてぎりぎり立ちますから」

警察の言い分。報道する側の論理。どちらにも理はある。しかし、
この問題において忘れてならないのは、あくまで被害者・加害者を
含めた「われわれ」の利益だ。だからこそ、警察、報道陣、両方の
理屈を検討する必要がある。そして、本作ではそれが克明にリアリ
ティをもって描かれる。

この問題を誰もが自分のものにするために、本作は有益な参考書
になりうるだろう。

働く男の^{きょうじ}矜持を突きつける

刑事はどのようなメンタリティーで事件を追っているのか。

愚痴らず楽しめ。俺たちは給料を貰って狩りをしてるんだ
からな——。

理性はともかく、犯罪を憎む本能は刑事に備わっていない。
あるのはホシを狩る本能だけだ。

本作で描かれている刑事の本心が、実際そのとおりであるかは知らない。でも、いかにもありそうだという現実味は持っている。それに、真実かどうかは問題ではない。

それらは、刑事だけでなく、仕事に賭ける男に共通する心情なのではないか。そう思わせるところに、本作の魅力がある。

本心から従順な部下など存在しないし、部下の内面を掌握している上司もまた存在しないと知っている。なのに自分だけは神になる。部下がつくたび使い勝手を考え、こいつはこんな部下、あんな部下と分類し、自分にとって便利でわかりやすい単色のラベルをせっせと貼ってきた。

「働く男の矜持」。いささか時代錯誤な表現かもしれない。しかし、警察はまさに旧態依然とした組織だ。いわば“男尊女卑”の思想がしっくりくる。

では、警察組織で働いているわけでもないわれわれが、現実世界で本作の主人公のようなプライドを持つことは適切か。

そこまで敷衍することは、無理かもしれない。典型的なサラリーマンのような人間は本作に登場しないし、自分の姿を劇中の人物に投影するのは難しい。

それでも、自分を見つめ直したい。仕事に忙殺される日々の中、少し立ち止まりたい。そんなときには、本作の主人公の心情に想いをはせることは有益だ。



はまなかあき
**葉真中顕『ロスト・ケア』でわかる
これからの社会派小説のありかた**

光文社 [単行本] ¥1575 [kindle版] ¥1260

とある介護事務所の世話をする顧客たちが異様な死亡率を示す。その裏にあるものは何か——。葉真中顕『ロスト・ケア』は、いま日本が直面する介護問題に真正面から切り込んだ“社会派小説”と言ってよい作品だ。

では、介護問題に興味のない人は楽しめないのか？ あるいは、“それらしい”キーワードを振りかざした、つまりは社会派を気取った小説なのではないか？ そんな邪推をする向きもあるかもしれない。しかし、われわれの社会の抱える問題をストレートに、飾り付けることなく読者に提示するという点で、じつは新しいタイプの“社会派小説”ではないかと思う。その理由を述べる。

「フーダニット」のおもしろさ

物語は〈彼〉の裁判のシーンから始まる。つまり、これは殺人事件。老人たちは殺された——という事件の真相が早々に明かされる。

したがって、ストーリーは「フーダニット」(Who done it?)すなわち「犯人は誰か」に焦点を当てながら進んでいく。

ミステリーとしての奇抜さはないかもしれない。だから、ミステリーマニアには物足りないと思う。しかし、多くの読み手にとっては、この「フーダニット」の要素は、物語を牽引するのに十分な魅力にあふれている。

法と社会、罪と罰の社会哲学的問い

「ミステリーとしての奇抜さはない」のは欠点ではない。おそらく作者はそこに重きを置いていない。

この作品から炙り出されるのは、「法とは?」「罪とは?」という社会哲学的な問いかけだ。

われわれが住む現実において、社会が持つシステムはあちこちで不調をきたしている。司法はそのひとつといえるだろう。

この作品が描き出す“罪人”たちを本当の意味で裁くシステム。それをわれわれは持っていないことに気づかされる。というより、「本当の裁き」とは何かすらも見えなくなる。

読みやすさを重視したエンターテインメント小説でありながら、あちこちで立ち止まってしまう。う〜むと唸らずにはいられない。

小説ではなくルポタージュを読んでいるかのようなリアリティー

りつぜん
に慄然とする。

作品が告発する現実が目の前に現れる

法とは？ 罪とは？ 社会とは？ というのはいわば〈マクロ〉の視点だ。介護問題も「介護保険」といった社会制度に言及するなら、それは〈マクロ〉だ。

しかし、この作品がえぐり出すのは、〈ミクロ〉の状況だ。

作品の装いこそ「ミステリー」ではあるが、描いているのはまさに現実そのもの。読者として“高みの見物”というわけにはいかない。読み手さえも、物語の渦中に投げ出され、登場人物と同じ位置に立たざるを得なくなってしまう。

殺人事件。多くの人が関わりを持つことなく一生を終えるもの。介護問題。誰もが何らかの形でいつか必ず直面するもの。

しかも――。

多くの人がそのことに気づかない。うすうす気づいていても、「そのとき」がくるまで先送りにしている。

その恐ろしさ。事態の深刻さ。

ことは介護問題だけではない。「何気ない日常を送るうちに忘れ去っている何か」「気づいてはいるけど見えないふりをしている何か」は私たちのまわりにも数多くあるはずだ。

そこに目を向けること。その重要性に気づかさせてくれる。

その意味で、読者の人生そのものをねじ曲げる。それほどの力を持っている作品だといえる。

あなたの扉を開く鍵 その2

クリエイターから学ぶ

世の中に優れた作品を送り出しているクリエイターたち。
天賦の才能の持ち主もいるかもしれないが、それだけで創造活動はできない。
つまり、われわれの人生に取り入れられるノウハウがそこにあるということだ。



つづきは正式版でお楽しみください。

ギヤhun工房⁵

© 2001 - 2014 GYAHUN Koubou

2014年1月1日 デジタル版 発行

2022年3月3日 デジタルリマスター版 発行

出版者 米田政行

発行所 Gyahun工房
mail@gyahunkoubou.biz

※表示の価格はすべて税込みです。また、情報は2013年11月末時点のものです。